

編集後記

電子版のみとなってこれで3号になります。前号でデザインを刷新しましたが、今号はさらに電子版ならではの機能も追加しました。具体的には、目次の青字箇所をクリックすればその文章の開始位置に飛び、URLをクリックすればブラウザと連動してそのURLが開くリンク機能を取り入れてみました。インターネットにつながった環境で本誌は読まれるであろうと考えての試みでしたが、いかがだったでしょうか。

とはいえ、今号の目玉は10名近い言語学者の方に寄稿いただいたJANESフォーラムでしょう。学会発表や論文など通常の研究成果にはまず示されることのないフィールドワークの様子などを開陳していただいたように思います。ひとえに北東アフリカで言語研究をされるといっても、さまざまなバックグラウンドそして問題関心をもって研究されていることが伝わってきました。また、これは人類学を専門とする私に限っての話かもしれませんが、近隣の社会でお互いフィールドワークをしているといっても、実際どのように調査が行われているのかわらず、神秘的なベールに包まれていました。今回その謎は大幅に解消されました。政治状況に翻弄され、過酷な自然条件や病気と悪戦苦闘しながら行われていること、現地の人たちに調査の意図を理解してもらい関係を築いてやっていくことが肝要であることなどわかりました。これらは分野を問わずフィールドワークを行う人たちにはおよそ共通した点なのかもしれません。

今回私が特に印象づけられたのはインフォーマントとの一期一会ということです。言語学にかぎらずフィールドワークでは得がたいインフォーマントとの出会いが研究に進展をもたらすことがあるのはたしかです。ただ、言語学ではその重要性は他分野の比ではないと感じました。私の理解が正しければ、言語学のフィールドワークでは、母語に精通するだけでなく、調査者の意図を理解し、長時間の調査につきあえるインフォーマントと出会うことが決定的に重要です。しかし実際にそうした人と出会うのは容易でなく、出会えたとしても別の機会には会えないかもしれず、するとインフォーマントをまた探さねばならないだけでなく、調査内容も練り直さなければならないといった具合で、得がたいインフォーマントとの出会いが調査の成否に直結する感があります。論文などの研究成果にはそうした様子は微塵も感じられず、むしろ専門用語を駆使して言語の深遠な世界を解き明かしていく感がありますが、実際には人間的な出会いそして濃密なやりとりの中で調査が行われていることを改めて知った次第です。読者にはより言語学の中身に興味を覚えた方もおられることでしょう。いずれにせよ、今回の企画が何かのきっかけになれば幸いです。取りまとめていただいた柘植先生、若狭さん、本当にありがとうございました。

石巻の大会の際に編集代表の役を仰せつかってはや3年。何とか3号発行することができ、ほっとしています。学会員の皆様の活発なご寄稿と編集委員の多大なご協力の賜物です。本ニュースレターが今後さらに充実したものとなっていくことを願います。

藤本武

JANES ニュースレター 23号

2016年3月31日発行

編集・発行：日本ナイル・エチオピア学会

編集委員：藤本武（代表）、佐藤靖明、増田研、村橋勲、吉田早悠里

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入

Tel: 075-415-3661 Fax: 075-415-3662 E-mail: janes2@nacos.com

JANES